

# 「私が石垣島への自衛隊配備に反対する理由」

石垣島への自衛隊配備を止める住民の会 共同代表 上原秀政  
八重山毎日新聞 2015年12月11日付 論壇

## 石垣住民の命より国体護持

先の大戦の終了間際、ポツダム宣言を受諾するかどうかをめぐり最後まで問題になったのは「国体護持」の一条件であった。宣言発信から降伏まで38日間もかかっており、早期に受諾しさっさと降伏文書へ調印してさえいれば、広島と長崎への原爆投下、シベリアでの強制抑留も回避できた可能性があった。また本土防衛の最後の砦と位置付けられ、県民の4人に1人が死亡した沖縄の地上戦も、結局は国体護持のための盛大なる犠牲であった。

今回の南西諸島陸上自衛隊配備計画を見ると、中国に一番近い与那国島への沿岸監視部隊の配備から始まり石垣、宮古、奄美大島への地対空、地対艦ミサイルの配備、新たに辺野古を加えた米軍基地及び沖縄本島の既存の自衛隊となる。配備地図の全体を見て、やっぱり根本は国体護持なのだなと感想を新たにす。政府にとって、尖閣を含む領土、領海を守ることは、石垣5万の住民の命より重要なのである。

## 自衛隊は軍隊である

太平洋戦争が終わって5年後、1950年6月末に朝鮮戦争が勃発したが、日本に駐留していたアメリカ陸軍が朝鮮半島に移動する際、当時の吉田内閣のもと、その兵力数の7万5千人を穴埋めする形で警察予備隊が設置された。その後、保安庁を経て1954年に防衛庁の自衛隊と形が整えられていくのだが、その過程の中で、東京裁判を免れた旧日本陸軍の元兵士がどんどん組み込まれていった。東条英機の元秘書官やノモンハン事件の参謀、戦時中の作戦部長なども復員局から防衛庁に移動してきている。

その旧陸軍の体質を受け継いでいるのが現在の自衛隊である。尖閣をめぐって中国軍とドンパチ始めたがっている上官がいるとしたら、自作自演の戦争へのストーリーを作り出さないとも限らない。軍隊というのは実戦をして初めて仕事をしたことになり、満州事変など過去の例のように策略をしてまで戦いを始めたいという雰囲気になってもおかしくはない。

## 人も住めない島

1990年2月、私は八重山病院の内科に勤務していたのであったが、ある当直の夜、海上保安庁の要請を受け長崎の漁船で発生した意識障害の患者の救助のため、へりに同乗し現場へ向かった。暗黒の海での探索に難航し、燃料の節約の理由もあり、近くにあった尖閣諸島南小島に降り立った。島の両側の塔頭のような岩山と、船底のような殺伐とした水もないような荒地の、海鳥の鳴き声だけがうるさい、人ひとり住めそうにない島であった。よい漁場だということ分かるがほとんどの八重山人にとって、命を捨ててでも守るべき島とは思われない。

## 自衛隊基地は原発と同じくらい危険

石垣島へ自衛隊基地が配備された場合、住民の生活は、事が起きるまでは普段と何も変わらないだろう。自衛隊隊員もPTAや地域の行事にも積極的に参加し音楽会を開いたりして地域に溶けこんでいく。しかし中国は基地配備完了と同時に、現在は台湾海峡をはさんで配備している中国沿岸部のミサイルを石垣島に向けるだろう。そして日中戦争が始まったらそのミサイルを発射、あっという間に石垣は壊滅状態におちいる。住民は疎開する暇などなく全員が死亡する。これは最悪のシナリオの一つだが何が起きてもおかしくない。福島的第一原発事故も想定外であった。いえることは、基地がなければ中国からのミサイル攻撃は起こらないというのは確かである。

「有事」の反対軸に「無事」があるとすると、有事の最悪が「日中戦争が起きる」なら無事は「戦争は起きない」である。こちらがナイフを振りかざせば相手はピストルを、さらにはミサイルをとエスカレートし次第に戦争へと近づく。なぜ有事の方向へ向かうのか。自衛隊基地配備は先にナイフを振りかざす行為と同じである。

## ぶっそうな基地はいらない

古来沖縄は、進貢と冊封の関係ではあったが、中国とは仲良くやってきた。観音崎に唐人墓という観光名所があるが、1582年に福建省アモイの中国人が石垣沖で遭難した際、石垣の人たちは協力して380人を助け、172人を福州に送り返した。石垣市はあちこちに埋葬されていた遺骨を集め、合祀慰霊のための唐人墓を1971年に完成させている。いっぽう、台湾の人たちとは戦前戦後を通じて互いに助け合い、仲良くやってきていて、島の人と結婚し親

戚関係にある台湾関係者も多数いる。なぜ今になってナイフを振りかざすような行為をするのか、八重山の住人にとっては余計なお世話である。

日本人の一人として国土を守るという気概はないのかと問われることもある。しかし国土を守る責任は1億3千万人の日本人全てに存在する。なぜ人口約5万人の石垣の住民に過重の負担を負わすのか。八重山の人は国境の島に生活しているだけで国土を守る責任は余るほど果たしている。さらに「防人」の役を果たす義務など全然ない。

## 災害派遣は広告塔

自衛隊の災害派遣は自衛隊法83条に定められた「従なる」任務にあたる。「普通に戦争のできる国」を目指す安倍政権はその第一歩として集団的自衛権行使を容認する法案を強硬に通過させた。これにより自衛隊の主任務は「外国の侵略からの国土防衛」の枠組を超え、中東など国外で戦争ができる軍隊に近づいた。

自衛隊の仕事は戦争である。国内での災害救助はあくまで戦地で戦う仲間を助けるための実地訓練の一環である。政府は、災害派遣の業務を自衛隊から分離独立させることも、既存の救助隊をさらに充実させることもできる。それをしないのは、災害派遣活動が広告塔としての役割をはたして、国民を自衛隊容認へと向けるのに好都合だからである。しかしこれからの自衛隊は平気で他国の人を殺す、いわば赤ずきんをかぶったオオカミに変身する。

## 観光業の妨げになる

基地があっても観光地として何も問題なくやっているところは沢山ある、自衛隊基地ができて何の問題もない、という意見がある。はたしてそれは「尖閣」という火種を抱える石垣島にも当てはまるのか。ちゅらさんブームが訪れる前まで、あやぱにモール（ユーグレナモール）や美崎町のあちこちで閑古鳥が鳴いていて、観光業と直接関係ない人でさえ八重山の将来を心配していたものだ。観光業は水もの、尖閣問題で実際にトラブルはなくても風評被害で観光客はパタッと来なくなる。回復には数年かかり、さらに風評被害が重なると石垣の観光業は衰退の一途をたどる。

## 人口は増えている

合計特殊出生率はある集団内で一人の女性が生涯に産む子供の数で、最低で

も2, 0以上ないと人口は減っていく。安倍政権の掲げる1, 8を達成しても日本の人口は減っていく。石垣の最近の出生率は2, 08、郡外からの移住者数を考慮すると人口はさらに増えている。過疎化の対策として自衛隊誘致を要請する自治体には、賛成はしないが同情はできる。石垣に自衛隊基地というぶっそうなものがあると、安心して子育てができないということでかえって人口減の要因になる。

## 石垣より東京が危ない

今後、集団的自衛権を行使して、自衛隊が中東に乗り込んでいけばイスラム世界への侵略とみなされ、イスラム国による防衛ジハードとしての日本国内でのテロが始まる。2020年にオリンピックが開催される東京が危ない。または日本全国に17か所ある原子力発電所に9・11の時のように飛行機での同時多発テロが起きたら日本政府は対応できるのか。

心情的には自衛隊基地配備反対なのだが声に出して言うと革新のレッテルを貼られそうで嫌だという人もいるかもしれない。しかし一人でも多く反対の声を上げないと政府は、八重山の人ほとんどが基地配備計画に賛成なのだ、と判断してどんどん計画を実行に移してくるでしょう。保守だ、革新だと迷っている暇はありません。基地はいったんできてしまったら永久的に石垣島に居座ります。沖縄本島では基地のない島を目指して長年戦ってきました。しかしいまだになくなる兆しは見えません。これまで軍事基地のなかったこの島に基地ができようとしています。戦争は始めるのは簡単だが終わらせるのは難しい、という先の大戦の経験を忘れてはなりません。取り返しがつかなくなる前に、自分の心情に従って「石垣島への自衛隊配備絶対反対」と意思表示していきましょう。